

3. 用語の解説

(1) コウチュウ類

昆虫(綱)の内、コウチュウ目に分類される一群。カブトムシを始め、クワガタ、コガネムシ、カミキリムシ、テントウムシ、ホタルなど、人気の高い種が多く含まれている巨大なグループである。昆虫の中で最も大きなグループで、その数は実に昆虫の3分の1を占めて、現在でも続々と新種が発見されている。

コウチュウ目の特徴はその名(甲虫)でも分かるように前翅が甲羅のように固くなっており、その下に柔らかい後翅を折りたたんで、デリケートな部分を保護している。

(2) 未記載種・原記載・新種・タイプ標本・タイプロカリティ

生物の種などの名は、新たな種が発見され、それに新たな名が付けられる等の手続きを経たものである。

なお、以下でいう名とは学名(万国共通の名)であって、和名(日本語の名)ではない。身近なところでは、ライオンは和名、学名は *Panthera leo* という。

昆虫等は大変種類が多く、新たな種だと分かっているにもかかわらず、名が付けられていないものが多数ある。この様な名が付けられていない種を「未記載種」という。

この未記載種に名を付ける手続きを文章をもって行なったものを「原記載」または「記載」という。原記載は動物命名規約という規約のもとにおこなわれ、学名が付けられるのである。そして、原記載が公表された時点で、名が付けられた昆虫ははれて「新種」としてわたしたちに受け入れられるというわけである。

なお、新種かどうかは、単に見かけないからとか日本で初めて発見されたということでは、直ちに新種とはならない。基本的には過去において世界中のどの国からも記載されていないということが前提となる。

新種が記載される場合、基準となる標本をもとに行われる。その基準となった標本を「タイプ標本」または「模式標本」といい、単に「タイプ」と呼ぶこともある。タイプ標本は、基準となった標本であり、非常に大切なものである。設備の整った公的機関で厳重な管理の下に保管されることになっている。

このタイプ標本が発見された場所を「タイプロカリティ」または「模式産地」という。タイプ標本は種などの分類群の基準となる重要な標本であるが、その産地であるタイプロカリティもタイプ標本が発見された地として特にその自然環境が保全されなければならない。

(3) Holotype・Allotopotype・Paratype

タイプ標本の内容については、非常に複雑であり、ここでは簡単に述べる。

先にタイプ標本について説明したが、基準となった標本が複数ある場合、その全部をタイプシリーズという。そのうちの明示的な唯一頭の標本を「Holotype」または「完模式標本」、「正模式標本」という。タイプ標本が1頭しかない場合は、それがあてられる。種の拠り所となる最も重要な標本であり、Holotype だけは原記載の中で必ず指定されなければならない。

タイプシリーズの中で、「Holotype」を除いた残りのタイプ標本を「Paratype」または「副模式標本」、「従模式標本」という。これは指定しなくてもよいが、万が一、「Holotype」が失われたときの予備となることもある。

「Allotopotype」は「Allotype」ともいい、「Holotype」とは異なる性別である個体の標本。指定されないことが多いようで、その場合は「Paratype」に含まれることが多い。